

日展ニュース

No. 191

<https://www.nitten.or.jp/> 令和7年9月29日発行

編集兼発行人 神戸峰男

第118回 日展にむけて



燦 燦 鈴木竹柏



「第一一八回日展を開催するにあたって」

日展理事長 宮 田 亮 平

この度、第一一八回日展を迎えることは、この上なき喜びであります。又とても意義深いことと存じております。明治期に日本文化をより高めるべく文部省の主導の下開催された文展から、とどまることなく日本の芸術文化の向上のために発信し続け、そして今日に至っております。

ところで気候変動による今年の夏の異常気象、又、世界情勢の不安定など、心安らぐことなき日々となつてきております。このような時こそ文化の力、芸術の力が重要な役目を担うと思っております。今こそ日展のなすべきことがあるのではないのでしょうか。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の五科の作家の方々の渾身の作品によつて必ずや感動や安らぎ、ときめきの共鳴を呼び起こしてくれる会場となります。どうか皆様の温かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第一一八回日本美術展覧会実施内容

会期 令和7年10月31日（金）～令和7年11月23日（日・祝）
 観覧時間 午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで。）
 休館日 毎週火曜日

入場料 ○当日券 一般 一、四〇〇円

（税込）○団体券（予約制）・前売券 一般 一、二〇〇円

※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。（ただし、入口で学生証のご提示をいただく場合がございます。）
 高校・大学生は無料。（入口で学生証のご提示をいただきます。）

会場 国立新美術館 東京都港区六本木七―二二―二



展覧会開催回数表記について

日展は明治四十年（一九〇七年）開催の第一回文展（文部省美術展覧会）を礎とし、時代の流れに沿って帝展（帝国美術院美術展覧会）、新文展（文部省美術展覧会）、そして日展（日本美術展覧会）と名称を変え、昭和三十三年からは民間団体（社団法人日展）主催の展覧会として引き継がれ、多様な変革を重ねながら長い歴史を刻んできました。その歴史と伝統に鑑み、令和七年開催の日展より、明治四十年第一回文展からの通算開催回数に改め、「第一一八回日展」と表記することといたします。

第一一八回日展 講演会・シンポジウム 映像による作品解説のお知らせ
 ・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。

（入場無料）於国立新美術館 三階 講堂 ※変更となる場合があります
 ※各日、講堂前にて整理券をお配りします。（30分前）

開催日	講堂でのイベント
11月1日（土）	午後1時30分～3時30分（日本画）※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 映像による作品解説 今年度審査員
11月3日（月・祝）	午後1時30分～3時30分（洋画）※途中10分休憩 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月8日（土）	午後1時30分～3時30分（彫刻）※途中10分休憩 「#彫刻の見方 十人十色」 第一部 第一一八回日展の見どころと特選受賞者「自作を語る」 今年度審査員 今年度特選受賞者 第二部 彫刻がわからなくても楽しめる作品解説 石黒光二・紺谷 武・野村光雄・村山 哲
11月15日（土）	午後1時00分～2時20分 ※途中10分休憩 特別講演会 日本画家 千住 博氏 午後2時30分～4時00分（工芸美術） 映像による作品解説 第一一八回日展 工芸美術の見どころ
11月22日（土）	午後1時30分～3時30分（書）※途中10分休憩 シンポジウム「日展の書」 （進行）高木厚人 遠藤 彊・倉橋奇帥・山本大悦・鹿倉碩齋・金子大蔵 作品解説「書」 有岡郊崖・岩村節庵・日比野博鳳

「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品（彫刻一部の作品）に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

第一一八回日展 審査員・係

第一一八回 日展審査員 九五名

審査員長（理事長） 宮田 亮平

第一科（日本画） 審査員 一九名

（外部審査員）

神戸市立小磯記念美術館長 岡 泰正
神戸ゆかりの美術館長 美術評論家 清水 康友

（理事） 福田 千恵 村居 正之
（会 員） 池内 璋美 加藤 晋
亀山 祐介 米倉 正美
米谷 清和 北村恵美子
能島 千明 藤島 大千
松浦 丈子 安田 敦夫
米田 実 辻野 宗一
石崎 誠和 山内登喜雄
村山 春菜

第二科（洋画） 審査員 一九名

（外部審査員）

世田谷美術館長 橋本 善八
川崎市岡本太郎美術館長 土方 明司
武蔵野美術大学客員教授

（理事） 小灘 一紀 斎藤 秀夫
（会 員） 倉林愛二郎 池田 清明
石田 宗之 菊池 元男
平野 行雄 一の瀬 洋
加藤 寛美 木原 和敏
佐渡 一清 西谷 之男
錦織 重治 福田あさ子
小林 理恵 齋藤 均
高田 啓介

（準会員）

第三科（彫刻） 審査員 一九名

（外部審査員）

筑波大学名誉教授 齊藤 泰嘉
常磐大学特任教授
山梨県立博物館長 守屋 正彦
筑波大学名誉教授

（理事） 池川 直 能島 征二
（監事） 栗山 賀行 伊庭 靖二
（会 員） 早川 高師 上田 ふみ
石崎 義弘 白石 恵里
片山 博詞 二塚佳永子
中原 篤徳 宮坂 慎司
前芝 武史 高砂 晴光
吉岡 徹 森田 一成

（準会員）

岡本 和弘 高砂 晴光
森田 一成

第四科（工芸美術） 審査員 一九名

（外部審査員）

岐阜県美術館副館長 正村 美里
元渋谷区立松濤美術館副館長 高波真知子

（理事） 井隼 慶人 三田村有純
（会 員） 大樋 年雄 河野 榮一
加藤 令吉 田中 照一
上原 利丸 木谷 陽子
久保 満義 角 康二
田中 紀子 森田 清照
小島 泰明 齊藤 晴之
桜田 知文 繁昌 孝二
堀 菱子

（準会員）

堀 菱子

第五科（書） 審査員 一九名

（外部審査員）

独立行政法人国文花財機理事長 島谷 弘幸
皇居三の丸尚蔵館長
大宰府天満宮 宮司 西高辻信宏
大宰府天満宮宝物殿館長

（副理事長） 黒田 賢一
（理事） 高木 聖雨 真神 巍堂
（会 員） 高木 厚人 明石 聰濤
遠藤 彊 鬼頭 翔雲
倉橋 奇艸 寺坂 昌三
中路佳保里 深瀬 裕之
山本 大悦 鹿倉 碩齋
金子 大蔵 中村 史朗
山内 香鶴

（準会員）

金子 大蔵 中村 史朗
山内 香鶴

第一一八回 日展《係》

（〇印係主任）

第一科（日本画）

池内璋美 加藤 晋 亀山祐介
◎米倉正美 米谷清和 北村恵美子
能島千明 藤島大千 松浦丈子
安田敦夫 米田 実 石崎誠和
辻野宗一 村山春菜 山内登喜雄

第二科（洋画）

倉林愛二郎 池田清明 石田宗之
菊池元男 ◎平野行雄 一の瀬 洋
加藤寛美 木原和敏 佐渡一清
西谷之男 錦織重治 福田あさ子
小林理恵 齋藤 均 高田啓介

第三科（彫刻）

栗山賀行 早川高師 伊庭靖二
石崎義弘 上田ふみ 片山博詞
白石恵里 ◎中原篤徳 二塚佳永子
前芝武史 宮坂慎司 吉岡 徹
岡本和弘 高砂晴光 森田一成

第四科（工芸美術）

大樋年雄 河野榮一 加藤令吉
田中照一 ◎上原利丸 木谷陽子
久保満義 角 康二 田中紀子
森田清照 小島泰明 齊藤晴之
桜田知文 繁昌孝二 堀 菱子

第五科（書）

◎真神巍堂 高木厚人 明石聰濤
遠藤 彊 鬼頭翔雲 倉橋奇艸
寺坂昌三 中路佳保里 深瀬裕之
山本大悦 石澤桐雨 鹿倉碩齋
金子大蔵 中村史朗 山内香鶴

わくわくワークショップ

対象 小・中学生とその保護者

(参加費無料・保護者は入場券を各1枚用意ください)

実施日程

11月2日・9日・16日(日曜日)
午前10時30分～日本画・洋画・書
午後2時～彫刻・工芸美術
※各教室約2時間

申込受付

ハガキかFAXまたはメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数 希望日・希望部門(第2希望まで)を明記の上お申込み下さい。申込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。
(受付締切10/24必着)

受付人数

各教室10組(20名程度)

☆日展作家が直接指導します。

☆参加費無料

【お申込み・お問合せ】

〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局展覧会係
(TEL 03-3823-5701)
(FAX 03-3823-0453)
(E-mail event@niten.or.jp)

第118回日展開催中のイベント

ひびく鑑賞会

―出品作家達とゆづり日展を鑑賞したい方に―

開催日程 11月10日(月)・17日(月)

定員 各回10～15名

参加費 1名 五、五〇〇円

(入場料、昼食、テキスト他)

時間 10時30分集合、16時10分解散(昼食つき)

※日本画・書まで、各科の担当作家

がご案内します。(主要作品のみ。)

※予約制(詳細は事務局までお問い合わせ下さい。)

●作品解説会

―一人たつて参加したい―

出品作家のお話に耳を傾けてみませんか

―一人たつて参加したい―

三三解説会 《個人の方》

―一人たつて参加したい―

出品作家のお話に耳を傾けてみませんか

時間 午後1時30分～(30分程度)

定員 各部門20名(5部門)

※参加は無料ですが各自入場券をご用意下さい。

※予約制(当日受付あり)

※土・日・祝・初日を除く

《サークルなどグループの方》

※予約制。事務局までご相談ください。

《学校行事、部活動など》

※予約制。事務局までご相談ください。

※予約制。事務局までご相談ください。

※予約制。事務局までご相談ください。

第118回日展行事日程(予定)

※係会関係

10月19日(日) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(洋画・工芸美術)

10月20日(月) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(書)

10月23日(木) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(日本画・彫刻)

10月30日(木)

○出陳者内覧

○大臣賞等受賞者発表

○出陳者懇親会

第1科 KKRホテル東京

第2科 上野精養軒

第3科 リーガロイヤルホテル東京

第4科 東天紅

第5科 ザ・プリンスパークタワー東京

10月31日(金)

○第118回日展開会式

11月13日(木)

○第118回日展授賞式

(国立新美術館講堂)

11月23日(日・祝)

○第118回日展閉会

《第118回日展チケット情報》 前売ペアチケット

通常、一般一枚一、二〇〇円(当日一、四〇〇円)の前売券を、ペアで

ご購入の場合、二、二〇〇円に。通常の前売券より二〇〇円お得です。

※前売コンピュータチケット・

日展公式サイトのみ

トワイライトチケット

時間限定の入場券

観覧時間 午後4時～6時

一般一枚 六〇〇円

※学生(高校生・大学生)は無料。入口

で学生証をご提示いただきます。

※会場窓口のみ販売

第118回日展前売券販売店のご案内

(10月1日より販売)

プレイガイド

チケットぴあ・CNプレイガイド

ド・ローソンチケット・ファミ

リーマート店内Eamiポート他

デパート(友の会)

東武・丸広

カルチャーセンター

読売・日本テレビ文化センター・

ヨークカルチャーセンター他

他に画材店・画廊・書道用品店な

ども取り扱います。

日展公式サイトでも販売してお

ります。

5

特別寄稿

日展解説会―作家の言葉に 接する貴重な機会として

岡 泰 正

「むかし東山魁夷先生と何度かお話ししたことがあるよ」などと言うと、若手の学芸員などは、シーラカンスを見るような視線を私に向ける。展覧会を担当した学芸員として作家と話すのは当然のことなのだが、その人が「歴史上の人物」に登録されると、肉声に接するということが想像しにくいのもかもしれない。

その意味で、第九、十、十一回と三度の日展神戸展を担当した者として意義深かったのは、各作家自身が語られる「解説会」をセミナー室で開き、そのほとんどを聴講したことである。およそ一時間、三〇点ほどの画像を中心に一般来館者向けに出品作を解説されるのだが、作りの言葉には、いわば生産者の苦闘や他者への敬意が息づいていて、感銘を受けた。十一回展



では、会員中心で計十五回十八人の作家が担当された。平日ほぼ毎日である。五科それぞれの分野で、人気の先生の時は、入場待ち列ができ、八〇席が満席になった。

とって、皆さん謙虚だな、と感心しながら拝聴している。欧米の作家だとしたら、自分だけのことしかわからないからと、フルに自作だけを語り続けるのではないか、と思った。

自作を語る、これが貴重なのである。もつと描きこみたかったが、額装の引き取りが来るので観念した。明るい会場で見たら、アラが目につき、やはり弱いところが目立つ、それはこの道の部分です、などと反省の言葉を洩らされる。聞いている方は、まったくそのようには見えな

い。完全を期する作者にしかわからない秘密が聞けるのである。

私は美術工芸が専科だが、専門外の書の解説が何より新鮮であった。筆の運びを作家の体験からたどっていく。それは宇宙の星雲の流動を語るようであり、運筆の妙技を追体験するよう

なおむきがあった。

いかにもつらそうに、おずおずと洩らされた、ある書の先生の言葉である。去年の夏は暑かった、涼しい朝五時に起きて、制作を開始した。何も考えず筆を運んだ。「この歌はすでに七百枚は書いていて、どう崩すか、どこで始めるかは、頭にはいつていました、改行の部分は一ミリも動かせない強いこだわりがありました、とにかく無心でした。その朝、書き始めた二枚目でした」。無心で生まれた出品作は、七〇二枚目ということなのである。私はあつけにとられて写されたスライドを見つめていた。この作品は、日展で賞を受けるのだが、作者の言葉を聞かなければ、制作の凄みは、少なくとも私にはわからない。

自作を語るのには禁じ手、表現者は作品だけで勝負するものだ、というのが正論で、先生方のしぶしぶ感によくわかる。解説者は、自作以外の作品は惜しみなく誉められる。特選の新しい

才能に敬意を表し、ともに喜ぶ気持ちが伝わって来る。会員、一般入選を問わず、新しい才能を求め、ひるがえって自分に厳しくあるこの視点が日展を支えているのだと感じられる。

解説会のあと、必ず先生方は聴講者とともに作品の前に行かれる。そこで出るのは、自慢ではなく、新しい表現の確認であり、技術への敬意である。五科すべて、理事の先生方ふくめ、ほとんどの作品が、もつとこうしたかった、ここが足りない、しかしここはよく出来た、という反省と自負を封じ込めて飾られているのだとその時、私は思う。展示室内の平等―理事、会員、会友、一般入選も等しく展示された空間で、技術と才能を競いあっている。日本美術のスタンダードの今を提示し、内省を促すこうした伝統が、日展ではないかと思う。

岡 泰正（おか やすまさ）



一九五四年舞鶴市に生まれ神戸で育つ。関西大学大学院博士課程前期、美学美術史専修修了。一九八二年神戸市立博物館設立準備室に学芸員として勤務、展示企画部長を経て、二〇一五年から神戸市立小磯記念美術館、神戸ゆかりの美術館館長。博士（文学）。一九九四年第一回鹿島美術財団賞。著書に『めがね絵新考』（筑摩書房一九九二年 第四回倫雅美術賞）、『司馬江漢』（新潮美術文庫十五 一九九八年）、『日欧美術交流史論』（中央公論美術出版 二〇一三年）ほか

紡ぐ力

山崎 亮

幼い時から歴史が好きだった。国内外の歴史上の人物に想いを馳せ、その生きざまに共鳴したり反発したりしながら、自らを歴史の中に投影することを楽しみにしてきた。本質的に人がなせる業に興味を抱いていたのだろう。人文学的な志向が自らにあることを感じてきた。

その後、縁あって成田山書道美術館に奉職して現在に至っている。有り難いことに美術の中でも大学で専攻した東洋史学と関係の深い、書の世界で仕事をさせていただいている。作家の内面が表出する美術は、人文学の中でも最も人間らしさが出る分野の一つだろう。研ぎ澄まされた技法の中に各々の作品が発するオンリーワンの個の魅力を逃すまいと心に誓い、日々過ごす毎日である。

美術館で仕事をするようになり、日展を見学することは欠かすことが出来ない年中行事となった。書の分野では多くの作家が日展を一年の集大成と捉えていて、話題となる作品も多く、当館にご寄贈いただいた多くの日展出品作も収蔵品の核となっている。そのため、私は日展が始まると自らの美術史のページを新たに書き込むような気持ちで、展覧会を見学している。

私は日展を歴史学における「正史」のような存在だと考えている。

近代以前と、以降の美術の大きな違いは、大衆層の美術活動への参加だろう。かつての美術作品は、依頼者が作家に制作を依頼することにより生み出されるものが多かった。従って作品

は依頼者の意に沿う内容表現となる前提があり、鑑賞者も制作依頼が出来る富裕層とその周辺の人々に限られていた。一方、近代以降は多くの美術作品は展覧会へ出品された作品から生まれている。日展をはじめとした展覧会には誰もが出品することが出来るようになった。鑑賞者もまた、作品を購入せずとも美術館という開かれた場で鑑賞することが出来るようになった。つまり、出自も境遇も異なる様々な立場の人々がそれぞれの角度から美術を楽しむことが出来る時代になったのである。だが制作も鑑賞も自由になった反面で、自由さゆえに作品を評価する一定の基準を人々が希求していたことも確かではないだろうか。

日展は官展に端を発し、長い間鑑賞者に美術に親しむ機会を提供し、また作家に制作への目標を示してきた。日展が各分野の美術をコンテストとして評価、判定することで一つの確固たる基準が出来、約一二〇年にも及ぶ長い間活動を積み重ねることによって今のような存在感を得てきたのだと思う。

歴史学における「正史」もまた、長い間に多くの研究者が史料批判を行なって校注を付け加えることでより「正史」として多くのものを詳しく伝える史料となってきた。私はここに両者の共通点を感じるのである。

私が日展に期待することは、今まで日展が示してきた道をこれからも変わらず示し続けていくことだと思う。日展が美術の基準を示すことで各分野の美術論に柱が出来、美術がより深く論じられてきた。それは日展のみならず、日展

外における美術活動においても影響しているはずである。美術論が盛んに交わされる世の中こそ美術もまた発展する。この存在感こそ約一二〇年にも及ぶ長い間、この国の美術界を牽引してきた日展の最大の魅力に違いない。今年も日展の開幕が近づいてきた。今から楽しみである。

山崎 亮（やまざき あきら）



一九七三年東京都に生まれ千葉県で育つ。立正大学文学部史学科卒業（東洋史学専攻）。一九九八年成田山書道美術館学芸員、現在、同学芸係長。編著に『菅間

コレクシヨン 江戸時代の書 禅林墨跡を中心に』（成田山書道美術館 二〇〇八年）、『成田山書道美術館所蔵名品選 明治一五〇年の書道』（共編 芸術新聞社 二〇一八年）、『赤井清美の仕事と明清の書』（共編 成田山書道美術館 二〇二五年）などがある。

第一一八回日展 各科審査員より

記憶の中の日展

米倉正美 (第一科 会員・審査員)



日展開催の頃、爽やかな秋風がひんやりと沁み入り、何気にコートを着用していたこと。上野駅改札を出ると、黄金色に輝く銀杏の大木に迎えられ、舞い散る葉音までもが懐かしい。現在では気候変動や地球温暖化の影響で季節感すらもない。東京都美術館に到着し、緊張感の中エントランスへの階段を上るのが、父との秋の恒例行事となっていた。会場に一步踏み入ると、寂とした中に床の軋む音と沓音が心地よく響き、ゆったりとした時間の中で作品鑑賞に浸ったこと等等など。今も鮮烈に記憶によみがえる。

やがて、その日展に出品する時が訪れる。初めて美術館の搬入口に降り立った時の、あの緊張は現在も変わることなく続いている。初入選の感激が蘇る。更には審査員を拝命するまでに成長させていただき感謝の限りである。

今年もまた、この季節が巡ってきます。応募されてくる全ての作品と真摯に向き合い、目を凝らし耳を傾け、作者の想いの詰まった画面からの聲を逃さぬよう、鑑審査にベストを尽くします。

見るといって

辻野宗一 (第一科 準会員・審査員)

風景に見とれて絵を描くというスタンスで描いています。何が見えているのか、見えているのは何なのか、色々な見方や感じ方を探りながら、作品にする過程を楽しみながら描いています。とはいえ、目の前にある風景は奥が深くいつも打ちのめされています。常に対象にゆだね、たくさん教えてもらいながら進めるようにしています。できるだけその実感を画面に表現できると素敵なことだと思っています。



これまで先輩方や多くの方々からご指導いただきながら続けてきました。ことばだけでなく絵からも背中を押してもらい励みとなっていました。また長い歴史の中で先人たちが描かれてきた作品を見せてもらったたび、あらためて絵の素晴らしさに感動しています。絵は互いに影響を与えながらより深く描かれてきているように思います。

時間をかけて思いを込めて仕上げた作品のなかには、それぞれの作品のストーリーが詰まっています。その作者の思いを感じ取ることができるような気持ちをまつさらにして鑑審査に臨みたいと思います。

絵は人となりを映す

村山春菜 (第一科 準会員・審査員)

私はよく、都市や工事現場をモチーフにします。ビルや工場の多い東大阪で生まれ育った私にとっては、それが原風景だからだと思っています。初めて特選をいただいた作品も高層マンションとビル群を描いたもので、タイトルも「郷」としました。自分の親しんだものや身近にあるものを、感じたまま、自分に素直に表現したいと日々制作を続けています。そのため、現場での写生を大事にしています。現場の印象を模写するぞという意気込みは、私の思う「日本画」とって大事な要素だと考えています。

このたび、初めて審査員を拝命し、未熟な私に務まるのかという不安もあります。でも、描き手の生の「人となり」を感じとることができると絵に出会うことが楽しみでもあります。大学の恩師が、絵はその人が裸で立っているようなものだとおっしゃったことを思い出しています。審査員として、私の作品も私自身もすべて見られているという思いを改めて自覚し、身を引き締めて臨みます。



自分の世界があるかどうか

木原和敏 (第二科 会員・審査員)



制作に写真を参考にする方が多いと思います。その前に、実物のモチーフと対峙して過去にどれだけデッサンやクロッキーを重ねてきたかが重要だと思います。それが、モチーフを理解するための訓練になるからです。そこが抜けていると、写真を信じ切って写すだけの行為になりがちです。それでは、絵画として成立しません。

絵作りの際には、嘘をつかなくてはならない場面が多々あります。例えば、立体を平面にするには様々な捏造も必要になります。その時に、いかにモチーフを理解しているかが問われてくるでしょう。人物なら、量感、動き出しのような臨場感、それを表せているか。緻密かどうかは問題ではありません。さらには、構図、バランスも含め、いかに絵画にするために工夫されているか。世界を作れているか。そのような点を基準として、審査に臨むつもりです。

結局、絵の価値とは、世界観を見せられるかどうかだと思います。

審査員を仰せつかり

佐渡一清 (第二科 会員・審査員)

この度、二回目となる日展審査員を拝命いたしました。改めて身の引き締まる思いをいたしております。今回から展覧会の回数表示も第一回文展から通算しての第一一八回と表記されることとなり、その歴史の長さや重みに畏敬の念を抱かざるを得ません。それだけに、数多の立派な先生方の築いてこられた作品評価の精神を歪めることなく、良い作品の選出ができるように努めさせていただきたいと思っております。

時代と共に今日、様々な芸術形式が存在する中、絵画を取り巻く状況も変化しつつあります。日展絵画はその中心として継続していますが、「不易流行」という言葉があるように、より魅力があるものとなさねばなりません。そのため、自らもより良い作品追求に研鑽を積み重ねていきたいと思っております。



第一一八回日展審査にあたって

高田啓介 (第二科 準会員・審査員)



昨年公開された、画家が主役の映画「海の沈黙」(脚本・倉本聰、主演・本木雅弘)という作品で、私は絵画の担当をさせていただいた。

ロケは北海道小樽を基点に約一ヶ月、東京ロケも二週間同行した。ハマナスの咲く海辺、切り立つ岬など朝四時に起こされ現場で描いた。十時開始のロケがどんどん迫る。焦る。重圧に押し潰されそうな日々だった。思えば今日までああでもない、こうでもないという長い時間をかけて描いていたのは何だったのだろうかと思えて来る。私はこの映画で随分勉強させられた。

この度、日展の審査を拝命してとても緊張している。絵画には具象もあれば抽象もある。皆、この日のために一生懸命描いて出品する。入選、落選の現実を思うと心が痛む。体調を整えしっかりと良い作品を見逃す事なく審査に臨みたい。

苦しみと楽しみ

伊庭靖二（第三科 会員・審査員）



「小学校や中学校の頃にとっても楽しかった図工や美術を教える先生になりたい。」という気持ちで教育学部への入学を決めたのが当時の自分でした。そこで「彫刻」との出会いがあり、何も解らないままのスタートから師や仲間との出会いにも恵まれ、その魅力に気づきのめり込みながら六五歳の今になるまで制作を続けてきたのが今の自分です。

教員であつた自分が今まで制作を続けられたのは日展という公募展の存在があればこそであつたと思っています。

人が人の形（ヒトガタ）をつくる意味を考え、その形のなかに立体造形としての美しさだけでなく精神性をも詰め込みたいと日々もがいています。そのことは今の自分にとって苦しみでもあり、この上ない楽しみでもあります。

今年は、歴史ある第一一八回の日展において審査員を拝命することとなりました。それぞれの作家が自身の制作活動を通して作品の中に詰め込みたいと考えた願いや思いを同じ作家としてしっかりと受け止め審査にあたっていきたいと思っています。

日展との出会い

二塚佳永子（第三科 会員・審査員）

このたびは、日展審査員を拝命いたし身の引き締まる思いでいっぱいです。自身の作品も含めて審査員としての重責を思い、緊張感が日に日に増してきています。

思い返しますと、私の日展との出会いは日展金沢展でした。初めて会場の入口に立った時の、華やかに煌めく情景が忘れられません。こんな世界があるのだと圧倒されてしまいました。この出会いから、無謀にも日展に入選したいと思うようになり、その後は、幸いにも日展の多くの諸先生方に育てていただき、今日に至っています。

日展に応募するきっかけは人それぞれですが、会場に作品が展示された時から出品者には、かけがえのない喜びと尽きない苦悩の世界が開かれます。

審査に臨みましては、日展の伝統と新しい可能性を感じとれるよう真摯に作品に向き合っていきたいと存じます。



拾われたものの責務

岡本和弘（第三科 準会員・審査員）



このたび、第一一八回日展の審査員を拝命し、誠に光栄に存じます。その榮譽に喜びを覚えると同時に、重責を担う身として心を引き締めております。

思えば、幾度となく落選を重ね、最後の機会と覚悟して制作に臨んだ作品が入選し、以来今日まで制作の道を歩んでまいりました。今振り返れば拙い作品ではありましたが、その中にも何かを感じ取っていただけましたが、私にとつての出発点であり、作家としての背骨となりました。

今回の審査に臨むにあたり、かつての自分のように、零れ落ちんとする作品を見逃すことのないよう、一点一点心を尽くし、真摯に向き合う所存です。拾われた者としての感謝と自戒を胸に、作家の熱意と可能性を正しく見極める、公平かつ誠実な審査を心がけたいと存じます。



令和六年能登半島地震の震災後、三月末に避難所を出て自宅の片付けと応急修理の日々。少しづつ仕事も再開し、作品も手掛け始めた九月。裏山からの土石流が引戸を突き破り、流れ込んだ大量の土砂に、制作途中の作品の出品は諦めるしかありませんでした。復旧作業のなか、ふと頭をよぎるのは、「この先どのくらい作品を作れるのだろうか」「描きたい画をどれだけ実現できるだろうか」「中途半端に終わった作品に再び挑む時間はあるだろうか」そんな事を思いながらの土砂の撤去でした。

そしてやっと作品を出せるようになった本年、思い掛けず二度目の審査員を拝命する事になりました。日展に出品してきた中で多くの先生方から「審査に向かう姿勢」も学ばせて頂きました。「出品者への敬意を持つて真剣に向き合い『美術に誠実』である事を忘れない」。心の奥にその姿勢を保てるよう努力し、未熟ながらも責務を果たし、幸運にも創作活動に戻れた人生をありがたく思い、悔いなく創っていいこうと思っています。

第一一八回日展の審査にあたり思うこと

近年の美術界を覗いてみると国の内外を問わず、従来の考えでは想像もしない作品が発表されています。工芸の世界に於いても同様で随分考えさせられ、つい浮足立ってしまいそうになりがちです。しかし、そこで立ち止まり自分の立ち位置を考え、一八八年続いた日展の魅力を今一度考えることも大事なのではないかと思えます。

日展の工芸美術には様々な素材や技法があり、また表現方法も平面や立体等多岐に亘っています。一方では他分野だと思われていた作品が工芸部門に堂々と認められているのも現実です。私が携わっている染織の場合どうしても平面的な見方になりがちですが、立体作品を見て違った角度からの表現を生かせたら作品に深みや幅が出来るのではないかと思っています。

工芸美術のそれぞれの特性を最大限に生かし、個性豊かな素晴らしい作品が会場に勢揃いすることを期待します。



審査にあたり



今年度の日展新審査員を仰せつかり、感謝の気持ちと共に責任の重さに身の引き締まる思いをひしひしと感じています。

日展に出品するようになり三五年が過ぎま

したが、初期の頃は、どのような作品を作れば良いのかもわからず手探りの時期だったと思います。十年位経つと、それまでより造形の幅が広がり、特に原型を粘土で作る作業がワクワクしてきたように思います。そして近年は、自然界の物や事象をモチーフにしつつ、それを見て感じる自分の心の想いを作品に乗せて制作するようになってきました。

今回の審査にあたっては、出品者それぞれが作品に込めた熱い想いをしっかりと受け止めながら、真摯に取り組みたいと思います。その上で、工芸素材の質感表現、独創性や新規性、平面作品の構成および立体作品のフォルムの在り方の審美性、技術・技能等、しっかりと注視していきたいものです。そして、日展の工芸美術がさらに発展していくための良い展示になるように！

識鑒しきかんが問われる立場で

鬼頭翔雲（第五科 会員・審査員）

第一一八回日展審査員を委嘱され、その任の重さに身の引き締まる思いをしております。

五科の入選率は毎年一割という極めて厳選であります。私は若い頃から一年は日展で始まり日展で終わるという思いで書生活をしてまいりました。年間、多くの書展で活動しながらもその核には常に「日展作品」ということが頭から離れません。おそらくこの思いは日展出品者は誰でもそうかもしれません。その作品は日頃の弛まぬ努力と精進を集大成したものであり、正しく「心技体」つまり技法のみならず筆意の裡には鍛錬、精選された人格と生命力が宿っているといっても過言ではありません。

毎年、選外作品の中にも優れた作品があります。その違いは紙一重の差かも知れません。入選率一割の厳しさはそういう所にあるのでしよう。そして審査員の識鑒を問われるということも事実です。出品作品に最大の敬意を払い、その任を果たしたく考えております。



応募者の願いに

思いを馳せながらも公正な審査を

寺坂昌三（第五科 会員・審査員）

「一生に一度でいいから日展に入選したい。」

多くの応募者に共通する願いです。

合評会でのことです。何人かの方にアドバイスしましたが、筆遣いについてはうまく伝えられませんが、後で書きながら説明しますね。」

という約束をしました。

説明を始めると周りにいた人も集まって来ました。「ここはどう筆を運べばいいですか。」「もう一回書いてください。」等、皆さん熱心です。その場面を写真に撮った人がいて、見るとそこにいるほとんどの人が前のめりになっています。意欲が姿勢に表れているのです。

「書を深く学びたい。技術を身に付けたい。できることなら入賞・入選したい。」みんなそう願いながら制作しているのです。

日展審査員という栄誉を賜り感謝申し上げます。審査にあたっては、一作一作に込められた願いに思いを馳せながらも情に流されることがなく、客観的で公正な審査をしていきたいと思えます。



新審査員として

鹿倉碩齋（第五科 準会員・審査員）

この度、第一一八回日展において審査員という大役を拝命し、身に余る光栄であると同時に、その重責に身が引き締まる思いです。

「書家になる」と覚悟を決めた学生時代、その先にある目標は日展でした。自分の思い描く未来には、日本最高峰である日展は欠かせない憧れの存在でありました。かつては、日展に挑戦することすら叶わず、出品しても落選を繰り返すという厳しい現実。たとえ入選しても、その喜びも束の間、常に自作と対峙し、反省と試行錯誤を重ねる日々が続きました。日展を通して、作品を生み出す苦しみ、突き抜けた時の喜びを体感する日々は有難いことに自分の人生に彩りをもたらしているように感じております。

今後、諸先生方のご指導を仰ぎながら更なる高みを目指して邁進していく覚悟です。

審査員として、公正かつ真摯な姿勢で臨み、日展の精神や芸術、文化を未来に繋ぐ一助となるよう誠心誠意、責務を全うしたいと考えております。



～夏休み一日ART体験～

第20回 **ワンデイアート** レポート

連日の猛暑の中、日展会館のイベントスペースで、「第20回 Oneday Art」が開催されました。

今年は初参加の方も多く、大人と子供、あわせて270名の方が参加してくださいました。作品展もたくさんの方が並び、スポットライトを受けて輝く自分の作品に、驚きと喜びの参加者の表情が印象的でした。

作品展の様子は公式サイト（子ども日展ページ）で紹介、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

《指導作家》

7月19日 **工芸美術（漆）**

青木宏憧 川口 満 武田 司
繁昌孝二 山口和子 斎藤卯乃
林 香君

7月20日 **書**

井上清雅 綿引滔天 植松龍祥
岩井秀樹
（オブザーバー）高木聖雨
（サポート）尾花太虚 角田大壤
滑田耀齋 松浦龍坡 秋山彩華
増川雪子

7月26日 **彫刻**

吉岡 徹 寺山三佳 廣川政和
堀内有子

7月27日 **日本画**

（オブザーバー）山田朝彦
（サポート）鈴木紹陶武 安田陽子
永江智尚 境野里香 宮地淑江
亀山祐介 岩田壮平 川田恭子
能島浜江
（オブザーバー）米谷清和
（サポート）新川美湖 安田敦夫

8月3日 **洋画**

桑原富一 片岡世喜 菊池元男
佐藤祐治 田中里奈 田辺知治
前田 潤 茅野吉孝
（オブザーバー）佐藤 哲

《ご協力いただきました》

株式会社栄豊斎、株式会社吉祥、株式会社玉蘭堂、株式会社呉竹、株式会社ケーエス、株式会社光雲堂、株式会社東海丸二陶芸、株式会社平助筆復古堂、株式会社墨運堂、東洋額装株式会社



賛助会員制度《日展パートナーズ》
（掲載希望者のみ 令和7年8月末現在）

●個人

東 晋一郎様	新井演子様
飯田真未様	石崎國夫様
井谷善恵様	井上道守様
今田功一様	今村忠司様
岩田 薫様	梅崎 壽様
梅澤真那様	角井 博様
梶山純子様	兼重勇希様
菊池和久様	栗原直子様
呉 祐輔様	黒田浩平様
児玉安司様	近藤禎男様
坂本美賀子様	佐川かおる様
澤井和行様	高木和美様
高木寛史様	田頭明子様
田頭益美様	高橋千笑様
竹尾明子様	竹本葉子様
田中宏欣様	土屋礼央様
寺岡宏高様	中室里恵様
西田俊通様	西村潤帰様
西村友子様	野田裕一様
藤田理恵子様	藤本真之様
堀 稲子様	宮島幸男様
村里 暁様	森嶋順子様
吉見次郎様	

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様	株式会社 大垣共立銀行様	岡崎信用金庫様	株式会社 玉蘭堂様	謙慎書道会様	一般社団法人 光風会様	公益社団法人 創玄書道会様	株式会社 高山草月堂様	株式会社 千葉銀行様	株式会社 筑波銀行様	T&Tパートナーズ法律事務所様	一般社団法人 東光会様	東洋額装 株式会社様	株式会社 西文明堂様	公益社団法人 日本書芸院様	ニユーカラー写真印刷 株式会社様	株式会社 原汲古堂様	一般財団法人 ビオトピア財団様	福井素鳳堂様	有限会社 みなせ筆本舗様	一般財団法人 桃園学園様	株式会社 谷中田美術様	菱三印刷 株式会社様	株式会社 リンクス様	株式会社 和光様
------------------	--------------	---------	-----------	--------	-------------	---------------	-------------	------------	------------	-----------------	-------------	------------	------------	---------------	------------------	------------	-----------------	--------	--------------	--------------	-------------	------------	------------	----------



《猫、磊悟隴の夢》
(平成21年 第41回日展出品作)



《ソロモンの指輪》(平成元年 第21回日展出品作)
日展会員賞



《私と猫》
(第1回日春展出品作)



《康枝夫人と九匹の猫》
(平成24年 第44回日展出品作)

無常のこの世

第一科日本画 会員 田 島 奈須美

私は文士の父に憧れ童話作家を志していました。我儘で団体生活の苦手な私は小学校から学校に通う事はいたしませんでした。心配した両親がお願いした、お稽古事や勉強の先生も私の我儘に呆れ、仮病を使い、いらっしやなくなる事態でした。そんな私が二十歳を過ぎた頃、ひよんな事から日本画を学ぶ事になり、最初の先生は、伊東深水先生と御子息の万耀先生です。お二人の先生は「作品は自分の分身です、命を懸けて描きなさい」と申されました。生まれて初めて一生懸命する仕事に感動し、私は絵を描く事が大好きになりました。でもある時から絵の学校は勿論、学問を学んでこなかった事に不安になり、幼い時から、可愛がって下さっていた、慶応義塾の高橋誠一郎先生に相談すると、高橋先生は「それならば月に一、二度、僕の所に来なさい」と仰いました。先生の所にお伺いすると沢山の浮世絵を見せて下さったり、福沢諭吉先生の事など、私の為になるお話をして下さい、時には歌舞伎にもお連れ下さいました。その後、万耀、深水先生が相次いで亡くなり、高橋先生の推薦で、私は、橋本明治先生の門下生となりました。橋本先生は「君は先輩の画家や僕に憧れてはいけません」と常に仰り、橋本先生の亡き後、高山辰雄先生は「貴女は絵の勉強などしてはいけません、只いつも絵とは何だろうと考えて居なさい」と仰いました。

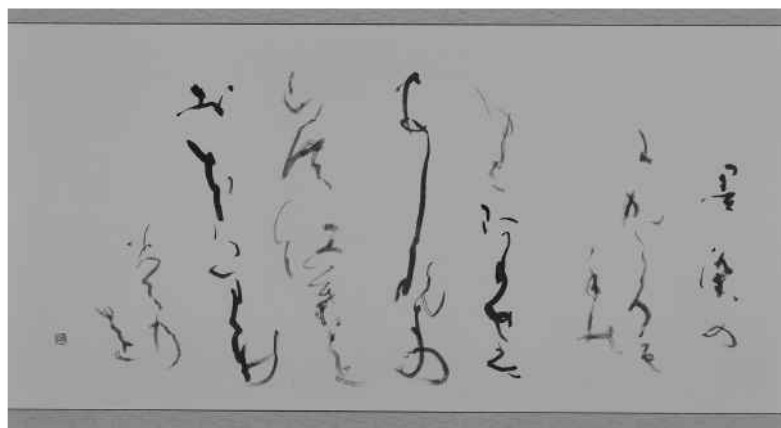
庭の枝垂れ桜の満開の日に、夫が亡くなりました。夫を亡くし暫く絵から離れようと思って居た私に、奥田元宋先生が、あの大きな瞳で「日展の作品を描けよ、もし君の絵が無かったら僕は君を許しませんよ!!」とまで仰り励まして下さいました。真底、私の事を心配して下さい下さった先生方が皆亡くなり、愛する両親も姉兄弟も亡くなり、大切な友人も亡くなり、可愛い犬も猫も亡くなり、耐え難い淋しい日々を悶々と過ごしている私は、「諸行無常」が大嫌いな言葉です。



扁額 《和楽》 日比野五鳳



昭和三十八年頃 市川実家にて
日比野五鳳先生と本人



《墨染》（平成28年 改組 新 第3回日展出品作）内閣総理大臣賞



《雲の秋・菅裸馬》
（令和7年 現代書道20人展出品作）



原点

第五科書 理事 土橋靖子

千葉県市川市に生まれ育った私の家には、私が幼い頃、母方の祖父で後に師となる京都の日比野五鳳先生が、上京の折、よく泊まりに来ていました。どこか古武土的な厳しさもありましたが、私たちにはいつも穏やかで優しい祖父でした。そんな縁もあるのでしょうか、私の家には、物心ついた時から祖父が書いた扁額「和楽」が鴨居に掛かっていました。もちろんそれが何なのか、当時はわかりませんが、日常の中に同化したつ、当たり前のようにいつもそこにありました。

それからから中学高校一貫校に進学し、そこで書の恩師・檜崎華祥先生と出会い、またそれがきっかけで、あらためて中学二年から祖父に書の手解きを受けるようになりました。さらにそれからは進路を書と定め、東京学芸大学に進学、専攻科を経て日展には二十三歳で初入選を果たさせていただきました。

書の道にひたすら進むうち、何年か経って実家となった市川の家に寄り、五鳳先生の扁額をあらためて見た時は、懐かしさと共に、一見何の変哲もないと思っていた書の、技術を昇華した清らかな精神性の高いものさばらしさにやっと気づきました。平安時代の一見脆弱にも見える「和洋の書」に抗うような、凛とした「日本の書」の一つの姿とも思いました。

五鳳先生からは数多くの言葉をいただきましたが、中でも「書にはその人の人生観・世界観が現れる」と言われた事が今も胸に強く残っています。書の古典・古筆を常に体の一部に据えながら、それを昇華し、自分らしく、豊かなイメージをもって再表現してゆくのが書だと思っていますが、自分磨きをしてこそ、この人生観が深まるのでしょうか。

祖父の扁額「和楽」は、現在、実家から自分の家のアトリエに移し、私は日々またその下で筆を持っています。

常に筆を紙に突き立てて強さを内に隠した線、銜いなく、清らで侘び寂びに通ずる味わいある風情、これこそが祖父の人生観そのものなのでしょう。

この書は、時として寄り道をしたり迷い道をしたりする私を叱咤してくれます。まるで、古武士姿の着物の五鳳先生が上から見守ってくださるかのようです。

五鳳先生のこの扁額「和楽」は、私の書との出会い、そして原点です。

刊行物のご案内

第二一八回日展作品集

- 定価 三、五〇〇円（税込）
- 令和7年10月31日発行予定
- 五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
- 作家名・作品題名の英訳（巻末）
- 別冊 作家本人による作品解説、釈文（書）
- 諸資料
- A4判変型
- オールカラー 約一五〇頁
- 表紙 渡辺信喜・小灘一紀・山田朝彦・春山文典・土橋靖子（出品作・予定）

第二一八回日展図録

（五部門五分冊）

- 定価 各三、五〇〇円（税込）
- 令和7年11月5日発行予定
- 東京会場の全陳列作品図版・目録を収録（作家名・作品題名の読み仮名・英訳付）
- 全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
- 審査所感、授賞理由ほか諸資料
- A4判変型

第一科『日展の日本画』

オールカラー 約七〇頁
表紙 渡辺信喜（出品作・予定）

第二科『日展の洋画』

オールカラー 約一四〇頁
表紙 小灘一紀（出品作・予定）

第三科『日展の彫刻』

オールカラー 約五〇頁
表紙 山田朝彦（出品作・予定）

第四科『日展の工芸美術』

オールカラー 約一二〇頁
表紙 春山文典（出品作・予定）

第五科『日展の書』

全会員・審査員・篆刻はカラー、準会員・無鑑査・特選・一般人選はモノクロ 約二二〇頁
表紙 土橋靖子（出品作・予定）

日展作品集・図録

（バックナンバー）

○割引価格 各一、〇〇〇円（税込）
※在庫が僅少の回もございますので、お問い合わせください。

（問い合わせ先）

〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1
公益社団法人日展 出版物係
電話 03（3821）9543

日展会館（本館）利用案内

日展会館（本館）の貸しスペースはギャラリー・会議室・教室として、ご利用いただけます。（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）0453

表紙
「燦 燦」

二〇〇一年（平成十三年）
第三十三回日展

170×220cm

鈴木竹柏

（一九一八～二〇二〇）

神宮美術館蔵

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

丹羽 貴子先生（日本画会員）7・6・3
有山 長佑先生（工芸術会員）7・6・25
得能 節朗先生（彫刻会員）7・7・6
古賀 英治先生（洋画会員）7・7・25
櫻田 久美先生（洋画会員）7・7・29
高田 淑子先生（日本画会員）7・8・13
内藤 望山先生（書会員）7・8・16
前田 泰昭先生（工芸術会員）7・9・6

編集後記

今号の主な内容は、「特別寄稿」として、岡泰正先生と山崎亮先生に、日展への思いや日展の歴史と魅力について執筆くださいました。また「作家人生―私の仕事」では、田島奈須美先生（日本画）と土橋靖子先生（書）に、芸術を志したきっかけとなった恩師への思い出などを寄稿していただきました。さらに、今年度の日展審査員から各科三名の方に、審査にあたっての思いを述べていただきました。

日展は、今年度から開催回数を「第二一八回日展」と表記することになりました。一一八回は明治四十年第一回文展からの通算開催回数ですが、開催回数から歴史の重みを感じずにはいられません。今後さらに日本美術の作家のみならず、理解者や愛好家が一人でも増えることを切に願っています。

（山本）

編集委員

亀山 祐介 西田 真人
浅見 文紀 松野 行
野原 昌代 堀内 秀雄
上原 利丸 古瀬 政弘
歳森 芳樹 山本 大悦